
ゴメンね

和藤渚

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゴメンね

【Nコード】

N5825E

【作者名】

和藤渚

【あらすじ】

とあることでフィギアとしか話さなくなってしまった少年の話
気弱な僕の強気な生活（仮）番外編

（前書き）

これは、べた恋企画第2回告白をテーマにした作品です
恐らく、気弱な僕の強気な生活（仮）がわからなくても読めると思
います（汗）

この日もいつも通り登校していた僕、谷口龍二。たにくちりゅうじすると校門のところに髪の長いかわいい女の子が立っていた。

（あの制服はルドルフ学園の）

ずっと校舎の方を見ていた

「どうしたんですか？」

と声をかけると

「あの大道信虎っていうひとこの学校に」

「はい。いますよ。僕のクラスに。それがどうしたんですか？」

「いやなんでもないです」

といって足早に去っていった。

（なにしにきたんだろう？）

昼休み

「大道、へー買ったんだ？」

「あ、うん」

「よくそんなん買うよな？　好きなのか？　けっこ金かかるんだろ？　それって」

（話しかけてくれた）

大道君は嬉しそうに口を開いた

「まあそついうやつもあるけど」

「村内、お前そんなに興味あんのか？　気持ち悪い」

「なわけねえだろ？　あ！」

としまったという顔で大道君をみる村内むらうち

うつむいてこういった

「ゴメン用事があるから。うるさいから教室でよつか？　くるみちゃん」

と悲しそうに大道くんは教室から出て行った

（はゝまた自分の殻に入っちゃったよ……）

そう僕のクラスには未だにクラスメートのみんなに

なじめない人がいる。それは大道信虎くん。おおみちのぶとら出席番号3番

いわゆるオタクって人である。村内が見せろっていつてたのは

くるみちゃんのフィギアである。くるみちゃんとは今大人気

のアニメのヒロインである。もともとアダルトゲームのヒロイン

でオタクの間ではその時からメジャーになっていたが、アニメ化されて一気に

一般の人たちにも人気に火がついた格好となった。

いつもこんな風に話をかけてはいるが、一言二言返事してあとはフィギアとしか話さない。

そんな彼に僕たちは手を焼いている。

「おい！二川ジャマしてんじゃねえよ！！　珍しく好感触だったのに」

「まただね」

「誰のせいだよ？」

「いつもあゝだもんな」

「私あの人苦手。キモいし」

「でもなんとかしないと……」

「そうね、私達のクラスメートだし」

と僕たちは話し合った

僕の名前は大道信虎^{おおみちのぶとら}。小さい頃からアニメやゲームが好きでずっと夢中になっていました。おおきくなつていくに連れて周りもいつの間に避けられていました。そして中学2年の時、衝撃的なことを言われたのです。

それはある日忘れ物を取りに教室に戻ったときのこと
何人か教室に残っていたのです。

「なあ大道、きもくねえ」

「うんうん、すげーオタクだし」

「この間さ、あいつと話してたらさ、俺まで白い目で見られてよ
まいったぜ」

と小さい頃からの友達の望くんの言葉でした。

すごいショックでした。それに追い討ちをかけるように

「小倉？ 大道お前のこと好きらしいぜ？」

「十分あるぜ。だって唯一の女友達だもん」

「木根くん？ それは冗談でもやめてよね。ゾツとしちゃったじゃない」

「あんな薄気味悪い人から告白されたら……いや想像しただけでも
気持ち悪い」

「誰だつてそつだよ」

「すげー小倉鳥肌立ってんじゃない!」

「フツたら呪われそうじゃない?」

「ハハハハ。ありえるぜ。夜な夜なうなされるみたいな」

「ちよつと」

ちらつと廊下を見る小倉。

(信虎くん!……)

と好きな子からあんなこと言われたのです。その時僕は必死に走りました。そういままで仕方なく付き合ってたのです。

所詮オタクは普通世界から排除される存在と悟りました。

それからはフィギアにしか話さないようにしました。それが一番傷つかずに済むから……

「みんな、表面だけでしか付き合わない、腹の底では……僕をわかってくれるのは

くるみちゃん、君だけだよ」

と屋上でグラウンドを見ながら大道はそついった。

放課後部活も終わり帰っていると今朝の女の人がたっていた。

「あつ今朝の」

「ちよつとお話が」

と女の人と言った

僕たちは喫茶店にいった

「話つてなに?」

「実は信虎くんに私あやまりたいんです」

といきなり大きな声をだした

「どうしたんですか？いきなり。それに謝るって何を？」

「実は……」

と中学のことを話す小倉。

「そっか。それでか。実は10月になっても大道君クラスになじめないんだ」

「そうなんですか……」

とがっかりするような表情を見せる

「そうだ」

と僕は思いつき、何人かのクラスメートを呼んだ。そしていままでの経緯を話した

「てなわけでなじめるようにするにはどうすればいいかな？」

「それなら自分も同じ目線で付き合ってみるのはどうだ？」

と福川

「同じ目線ね？……確かにその方が仲良くなりやすいね。他には？」

「うーん……オタクとか関係なく誠心誠意を持って接する。それが1番……！」

とまったくもな意見をだす水島さん

「結構難しいよ？ それ……それができていればこうなっていないと思うよ？ 他には？」

「一度遊んでみるのは？ このケーキおいしい」

「いいアイディアだね。大友さん、話に集中してね」

「難しいな……俺はやはり自分から歩み寄らなければ仲良くなれないと思うが」

とも何んとも村内君らしい意見が出る

「そっか……！ 彼、1週間後……」

と小倉がとあることを思い出した
と話し合うみんな

「それだ……！」

「いいね。それ」

「でもうまくいくかな？」

「やってみないと」

「だね」

なんとかいい案がでた。

翌日もその次の日もみんなしつこく大道君に話しかけた。

しかしみんな惨敗……そしてまた教室をでていったそんな日が1週間続きついにこの日がやってきた

放課後

「くるみちゃん？ 今日もいい天気だね？ このまま寝ちゃいそうだよ」

「あっ！ いたいた。大道君」

「なんのようだい？」

ととげとげしい口調で大道くんがいった。

「何してんのかな？ って思ってた。いつもここで日向ぼっこしてたんだ」

「いこっか？ くるみちゃん」

「釣れないな」相変わらず。僕はいや僕たちはただ君と友達になりたいだけなのに」

「どうせ上辺だけだろ？ 腹の底ではきつと僕は気持ち悪いと近寄りたくないとか

思ってたんだろ？」

「果たしてそれはどうかな？ ちょっと来て欲しいところがあるんだ？」

と僕は大道くんの手をひいて教室まで連れて行った

「ドア開けてごらん？」

と誘導する僕。大道君はドアを恐る恐る開けてみた

パーンパーンというクラツカーの音の後

パチパチパチと拍手がおこった

「誕生日おめでとう！！！！ 大道君」

「おめでとう大道」

とそこにはパーティー会場があつた

「みんな……」

「実はさ今日が大道君の誕生日って知ってね。みんなでパーティーしよう

ってなつてね」

「俺はさ、お前がなじめないのにパーティーやっても意味がないっていったんだけどな？」

と村内くんそういう言つと

「何言つてんだよ？一番張り切つてたのはおまえじゃん」

「うるせ」

と福川くんが突っ込む。

「村内君はね、いろいろと指揮してくれてセッティングしてたんだ？いつもはふざけてばかりの福川くんだって、水島さんだって」

「この料理やケーキは全部、谷口が作つたんだぜ？調理実室つかつてな」

「みんなそれぞれ一生懸命このためにやってきたんだ。それでも上辺だけ

だと思つ？」

「ありがとう。こんな僕のために」

と純粹に感動している大道。

「当たり前じゃねえかクラスメートだもん」

「僕、オタクだよ？」

「そんなの関係ねえよ。それだけ夢中になれるものがあるってことだろ？」

「うらやましいな。私も夢中になれるもの見つかるかな？」

大友が関心するようにいうと

「なに言ってたんだよ？もう見つけてんじゃねえか」

「なに？」

「福川くん」

と大道君がいった

「言われちゃった」

「ハハハハその調子だ。大道」

パーティーはあっという間に時間が過ぎ、プレゼントを渡す時間になった

「はい。プレゼント」

とみんな一人一人、人大道君にプレゼントを渡していく
そして僕の番になった

「ちよつと待ってて」

と僕は教室の外にでた

「大丈夫かな？ちゃんとできるかな？」

と緊張するその人。

「できるよ？ するために来たんでしょ？ それにこれがメインなんだから勇気を出して」

と励ましドアを開けその人の背中を押して教室にいった

その瞬間みんな一瞬の沈黙の後に驚きの大フィーバーが起こった。
一方大道君は一瞬にして顔色が変わりうつむいた。

「小倉智子じゃねえか」

「お前これはやりすぎなんじゃ？ 本当につれてきたのかよ！」

「そんなにすごい人なの？ この人」

「たくいつもそういうのにうといんだからお前は！！」

と水島くんに言われた

「去年ミスラガジンでグランプリとって今、くるみちゃんの声もや
つてる、今大人気のグラビアアイドルさ」

とあるクラスメートに説明され

「へーそうだったんだ」

と僕は関心した

「知らないで連れてきたのか？ お前」

「うん」

と即答でこたえたと

「お前な〜……」

とみんなが呆れた

「いや自分から言ってきたんだよ？ ていうかこのパーティーも小
倉さんが発案者
なんだ」

「そうなの？」

小倉さんは大道の前に行った

「ゴメンね？ 大道君、いや信虎くん」

「謝られても」

「そうよね？ 心に深くついた傷は『ごめんなさい』一言じゃ治る
はずもないわね」

「今更なに謝りにきてんだよ。帰れよ！！ 俺がこうなったのはお
前のせいなんだから」

「大道が俺っていった！！」

と驚く福川

「そんなこと言わないでよ。小倉さんだって意を決してきてんだか
らさ」

となだめる僕

「そうよ。私のせい、全ては私のせい。私が素直になれなかったか
ら……」

「どういことだよ？」

「あの時ね」

「なあお前って好きな人とかいるのかよ？」

「いや」

そのときドキツとした

「そっか」

とホツとしたのもつかの間

「大道とか？」

私はすごく動揺した。必死に見せまいと

「……といってしまったのゴメンね。その結果あなたを傷つけることになってしまった。一生その傷は消えることはないだろうけど。謝っても謝りきれない」

「もういいよ。いまさらそんな話したって仕方ないし」

「それを謝りにきたのもう一つ。お願いがあるの」
「なに？」

彼女は改まって

「大道信虎さん、私、あなたのことがずっと前から好きでした。付き合ってもらえませんか？」

「嘘！！！！ 大道がアイドルに……」

「これは夢だ。絶対に夢だ」

と福川が呆然し、倉本が悔しがる

「さあ？ どうする？ アイドルからの告白だぞ？」

と村内が返事を促す

「はい！！ よろこんで」

こうしてオタクとアイドルというオタクにとっては夢のようなカッ
プル

が誕生した。そしてその日を境に彼どんどんクラスに溶け込んでいった

今では……

「このクリアの仕方わかんないんだけど？」

と男子と話し

「ああここね、みんなここでつまづくんだよね。こうやってこことおってグラウンプレス

をとって……」

「大道君？ 智子ちゃんとうなってるの？」

「ああ昨日久しぶりに1日デートしたんだ？」

「まさか大道君からのろけ話きけるなんてね」と女子と話す

でも

「くるみちゃん、みんなが誘ってくれたんだ。一緒に行こうね？」

と相変わらずフィギアと話すことはやめなかった。

「彼女いるのにね」

「ああ。でもあれがあいつだよ。あいつがフィギアと話さなくなったら

本気で心配するよ？ おれ」

という福川くんに対して

「そうだね」

と僕はうなずいた。

（後書き）

気弱な僕の強気な生活（仮）もよろしくお願いします

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5825e/>

ゴメンね

2010年10月15日22時29分発行